

筭石菖 (コウガイゼキショウ)

イグサ科イグサ属の多年生草本。日本在来種で全国の湿地、放棄水田、畦畔、水路沿いなどに生育する。草丈は10～40cmほど。茎は扁平で2稜があり、縁に狭い翼がある。葉は扁平で幅3mmほど、葉の内部に多数の細かい気室が集まって並び、1～数個の管に仕切りを付けることから光に透かすとアマダクじ状の濃淡が見える。株元から出る根生葉は線形で、茎につく葉は剣状の線形で、長さ8～15cm。6～7月頃から茎頂や分枝の先に独特な形状の集散花序を出し、4～10個の花が集まる頭花を7～10個程度付ける。花被片は線状披針形で先は長く尖り、さながら線香花火を上に向けたようである。花期は長く晩秋には全草が紅葉する。

和名は、葉の形状から昔日本髪を結うのに使った「筭」という道具と「石菖」から名付けられたとされるが、セキショウはショウブ科、帰化種のニワゼキショウはアヤメ科、セキショウモはトチカガミ科、さらにチシマゼキショウ科のチシマゼキショウなどがセキショウを名乗っている。一方のコウガイは、コウガイゼキショウの仲間以外には草本ではトチカガミ科のコウガイモくらいであろうか。

「筭」というのは、髪を掻き上げて髪を結う時に利用する道具の一つで、21cmほどの長さで厚みとしては薄手のものが多く、長い棒状のものや髪を掻き上げやすいように頭部から長い二本の足が出た形などもあったようである。その21cmほどの薄手の棒状の形状が本種の扁平な茎や葉に似ているということで「筭」と名付けられたようである。

山本周五郎の著作「日本婦道記」の中に「筭堀」という短編がある。1590年、石田三成が率いる軍勢から忍城を守った籠城戦を題材にした小説で、城を守る女性たちの強さが描かれている。詳しくは原典をお読みいただくとして、「筭堀」の謂れは次のようなものである。

城主が小田原城へ出向いている時、石田三成が3万の軍勢で忍城を包囲した。留守を預かる城主の妻・真名女は城を守ることを決意する。しかし城には300ほどの兵しかおらず、真名女は城を守るため老若男女を問わず、戦う意思のあるものを城へ招き入れた。すぐに戦準備が始められ、城中の武士の婦人たちだけで城壁の外側に堀を掘った。この工事は非常に大掛かりなものであったが、最後まで婦人たちだけでやり通した。工事を始めて間もなくのこと、婦人たちのある一組が「このような品が壕の中に落ちていた」といって筭を持ってきた。留守年

須藤 健一

寄である鞆負之助は「そなたたちの持場だ、筭が落ちているのにふしぎはあるまい」と返したが「これはわたくしどもの用うるものではござりませぬ」「そればかりではなく」とそばにいたひとりが云った。「わたくしそのお筭には見おぼえがござります、わたくしは数年まえまで奥へあがっておりました、その折たしかに見おぼえております、それはおかた様が日常お用いなされる品でございました」「これが、この筭が、おかた様の……」

鞆負之助は婦人の手から筭をうけ取った、或ることがふとかれの頭にひらめいた。

やはりおかた様だ、おかた様がおしのびで、自分たちと一緒に壕を掘っていらっしゃったのだ。婦人たちはそう囁き合っていた。

半日で落ちると三成に思わせた忍城であったが一月でも落ちなかった。この戦で忍城の城壁の外側に掘った堀を「筭堀」というようになった。



Juncus prismatocarpus
subsp. *leschenaultii*

K.S.
Sept 20/25